

五、再会

わたしは覚醒した・・

「おう、気がついたぞ」

聞き慣れた声でした。幻空さんだ。

どうして幻空さんがこの地底にこられたのか考える力がなかった。ただひたすら嬉しかった。生還したよろこびはおおきかった。

さて、だんだん意識がもどってくると、わたしは地底ではなく、どこかの家の寝床に横になっていることに気がついた。

「やれやれ。助かったようだ」と、鹿次郎先生の声をする。

「幻空さんのお経を聞き損なって、よかったですな」と、鳥飼いの吉蝶さんがいう。三人とも無事だったのだ。

わたしは顔をあげた。みんなにこにこと笑っている。

「ここはどこです？」と、わたしは聞いた。

「火を噴く島の村だ」と、先生。

「村？」

「村といえるほどではないが、人間が住んでいる。蜂蜜採りたちの村だ」

「わたしはどうしてここにいます？ 確か洞穴の底に落ちたはずですが・・」

「この吉蝶さんが穴に綱を降ろして、おまえを助けました」

「ま、みんなで、力を合わせて、ですけどね」と、鳥飼い。

「どうしてわたしが穴の底にいたのをしったのです？」

「猪平の荷物が裂け目に置き去りにされていた」と、先生。

「猪平は・・」

「墜死した死体が村のはずれに落ちていた。どうして落ちていたのか不思議だ」

「なにか飲むか？」と、幻空さんがいった。

「ええ」

「じゃあ、これを飲め。蜂蜜入りの果汁だ」と、幻空さんが茶碗を指しだす。わたしは半身を起こして飲んだ。腰の痛みはほとんど消えている。

「みなさんが無事だなんて信じられません。あの嵐を乗り切ったのですか？」

「それがおどろくな。この幻空さんのお陰だ」と、先生。

「へえ？ 嵐を静める祈祷でもしたのですか」

「あんまり嵐が酷いからおれもそうだったのだ。ただで乗せてやっているんだから、効き目のある真言でも唱えろ。こういうときにこそ、密教の真価をみせろ、と」と、先生。「そしたら、契印を結んで、吹きすさぶ風よ、静まれ、とわめきちらしたんだが、効くわけ

がない。しまいには、人身御供がいる。鹿次郎さん、あんたが海に身を投げろ、ということになった」

「で、身を投げた？」

「そうしたらここにいるわけがないだろう。だけど結局、三人とも海に身を投げたことになるな。なぜなら、船が波に叩きつけられて、ばらばらになっちまった」

「船頭は？」

「船にしがみついて、海の藻くずだ」

「で、三人は泳いでここへ？」

「わはは、じつはな。わしの発明した救命具をわしは背負ってきたのだ。あんたもしているだろう。わしが旅をするときは、道具一式背負って歩くことを」と、幻空さん。

「組み立て式の天幕まで運ぶといいましたね」

「その天幕さね。今度は船旅だから、浮かぶ天幕を工夫してきた。陸の天幕の底にぐるりと縫いつけた浮袋がある。海豹の胃袋だが、そいつを膨らませる。そして浮かぶ天幕にもぐりこんで三人とも漂った。水や非常食も備えてあった」

「お陰様で、いのち拾いましたよ。ただ、参ったのは、幻空さんと先生が天幕の中で議論のつづきをはじめたんでさ。漂流している間中うるさくて仕様がなかった」と、鳥飼い。

「ま、時間はいっぱいあったからな」と、先生。

「論争はさておき、わしの発明の天才にはおそれいったか」と、幻空さん。

「たしかにあればよくできていましたよ。わたしに今度貸してくださいませんか？」と、鳥飼い。

「なにに使うんだい？」と、幻空さん。

「三途の川をあれで渡れば、鬼の世話にならなくていい。先生もいかがです？」

「おれは要らんよ」

「どうして？」

「おれはあんたのように地獄にはいかないからな。極楽浄土で蓮の花に乗っかることになっている。あんな継ぎはぎだらけのものは要らない」

「なんだと、助かっておきながら、わしの発明品にけちをつけるのか」と、幻空さんが息巻く。

「まあ、まあ」と鳥飼いが中に入る。

「それでな」と、先生。「嵐がおさまると吸い寄せられるように、この島に漂着した。上陸してすぐにおまえたちの足跡をみつけた。その足跡を辿って洞穴に入って荷物をみつけ、おまえをみつけた、という次第だ」

「地蜂に追いかけてね」と、鳥飼い。

「で、それから、どうしてここへ？」

「あの洞穴は二股になっていたろう？ 一つはおまえの落ちた穴。もうひとつはここへ通じている。われわれはおまえを担いで、この村にたどり着いた。そしておどろいたぞ」と、先生。

「え？」

「ここは極楽なんだ」

「へへへ、先生用の蓮の花まで浮かんでいます」と、鳥飼い。

「ま、おまえもそこにいればわかる」と、先生。

「めずらしい鳥がいっぱいいますぜ。鳥笛では真似のできないいろいろな鳥ばかりだ。ちっともおどろかないから手づかみですぜ。極彩色の、尻尾の長い奴や、嘴のえらくでかい鳥とか、孔雀や鸚鵡とか・江戸に二、三羽持ち帰ったら、もう大金持ちだ」

「それで、わたしの父の消息は、なにかつかめましたか？」と、わたしは先生に聞いた。すると鹿次郎先生が腕を組んで、わたしにいうべきかどうか、ちょっと思案した様子だった。

「うむ。それについてはあとで話そう」

どどっ、と地鳴りがして、家が揺れた。

鳴動が以前より激しさを増したようには感じた。

六、樹上の祭り

数日もたつと腰の痛みもなくなった。そとにでたくてうずうずしていたわたしは、家をすべりだした。

背後に火山の斜面がせまっていた。斜面を這う蒸気が水滴となつてせせらぎとなり、集まって流れとなり、火山の麓をえぐって谷をつくったようだ。流れに沿って粗末な家の並ぶこの村がある。

吉蝶さんがいったように、色とりどりの羽やおおきな嘴をした珍しい鳥たちが、低く飛ぶ。ときどきけたたましい啼き声をあげてわたしをおどろかす。まだら模様の花の群れが、風もないのにしきりに首をふる。

流れにそってくだっていくと、谷の両側がせままって樹木が濃くなった。むっとする生温かい霧が昇り、低い雲となって狭隘な谷の上部を覆った。流れはだんだん太くなり、谷をやがて閉ざす絶壁を穿ち、滝となって湖に注ぐのだろう。

突如、巨大な円柱がわたしのゆく手をさえぎった。

狭い谷は、その円柱でふさがるほどだった。何十人が両手をつないでもとても抱えられない太さだ。みあげると、灰色の円柱の上部は、低い雲の中だ。

神殿の門柱、それとも、塔だろうか？

柱には蔦の綱がさがっている。綱のひとつが揺れて、雲の中から村の男がするすると降りてきた。頭に布を巻き、裸足だ。つづいて籠をさげた男たちが猿のようにすばやく降りてきたが、みんなどこかに消えてしまった。

わたしが啞然とみあげていると、また綱がゆれて、ふらふらと不器用な手つきでもうひとり降りてきた。やれやれ、といわんばかりに両手で膝をはらった。

「鹿次郎先生！」

「おお、馬之助、歩けるようになったか。どうした？ 鳩が豆鉄砲食らったような顔して」

「そりやおどろきますよ。雲の上から先生が降りてきたのだから」

「そりゃ、わたしだって最初はおどろいたよ。この大樹には」

「樹木ですか、これは！」

「もっとおどろくことがいっぱいあるぞ、この上には」

「どんな？」

「ま、だんだんわかってくるさ。幻空さんも鳥飼いも上だよ。気に入ったとみえて、ふたりとも、なかなか降りてこないんだ。おまえも登ってみるか」

「あの・・・」

「木登りは苦手か」

「わたしは父を探しにきたんです。木登りして遊んでいる場合じゃないのです」

「だったら、木に登らなければならないよ」

「え？」

「甚内殿はどうも、この樹のてっぺんにいるらしい。わたしもまだ会ってはいないんだ」

「こんな樹の上に？ どうしてです？」

「それもだんだんわかるさ。ま、登ってみろ」

わたしは太い蔦に手をかけた。木登りだけは得意だった。犬に追いかけられると、だれよりもすばやく木によじ登ったものだ。

すぐ、低い雲の中に入った。はじめて横枝があり、そのふとい横枝の股を利用して小枝で組んだ台があった。台からみおろしても、地上はもはやぼんやりとしかみえない。台からみあげるとそこから上は無数の枝が縦横に腕をのばし、さらに枝分かれし、葉を茂らせている。枝葉には、樟のような強い匂いがあった。

ここはまた鳥たちの世界でもあった。さまざまな鳥が枝から枝を賑やかに飛び渡り、おびただしい囀りであふれていた。

さらに上に登る。のぼるほどおそろしくなると思ったが、茂る枝葉が網のように足元を覆いかくしているので、不思議に高さや危険を感じない。

二段目の台にたどり着いた。かなり登ってきたのに樹木の幹はすこしも細くなつたようには思えない。この大樹はいったいどのくらいの高さなのだろう。

台でひと休みしていると、すぐ上のほうでひとの気配がする。わたしは急いで三段目をめざした。

三段目は、いままでの木の股の鳥の巣のような台とちがって、幹をとりかこんで円形に作られ、手摺りもめぐらされている。上と下との中継基地となっているのだろう。

そこに幻空さんと吉蝶さんがいた。ふたりはわたしが登ってきたのに挨拶もせず、目配せしてはるか先に突きだした枝を指さす。

十間ほど先の枝の上に、雨蛙のようにへばりついている男がいた。股の間にしっかり枝を挟みつけ、ずりながらすこしずつ枝先に進む。いのち綱もつけていない。みているだけではらはらした。もし手を滑らせ落下したら、一巻の終わりだ。

いのちがけで、男が求めているものは・蜜だった。

男がはりついた枝の先に、黄金色をした袋のようなかたまりが、いくつもさがっていた。蜂の巣だった。

ぶうん、ぶうん、としつこく蜜蜂の羽音の唸りがする。

蜂たちは巣をねらう蜜泥棒を警戒して飛びまわっている。蜜採りは防虫網もかぶらず、裸の手足も剥きだしのままだ。あれだけの蜂

に攻撃されたらひとたまりもない。わたしは先客ふたりと息をこらしてみていた。

蜜採りはちゃんと、蜂たちを追い払う手段を持参していたのだ。草をたばねた、たいまつだった。たいまつから煙りが燻っている。蜜泥棒が近づくにつれ、蜂たちは興奮して巣から、わあんと舞いあがった。そして蜜採りにおそいかかる。蜜採りはたいまつをふりまわして煙幕を張る。ときには枝や巣にたいまつをたたきつける。すると燻った煙がますますもうもうと渦を巻いて巣や蜂たちを包む。

ぶううん、ぶぶぶぶ・

煙幕にまかれた蜂たちは、攻撃をやめて一斉に退散していった。

「不思議だ・・」と、わきで幻空さんがつぶやく。

「まるで酔ったように、ふらふらしてますぜ、蜂たちは・・」と、鳥飼い。

蜂が退散したそのすきに、蜜採りは枝にさがる蜂の巣に手をさっくりとさし入れ、蜜蝋の半分を掠めとった。それを、釣り針のようなものに引っかけて、枝を伝って後退してきた。

「ふう！」と、幻空さんが安堵の息をもらした。

蜜採りは、蜜蝋を台の蔦籠に入れ、ふたたび別の枝の巣にむかった。注意してみると、ほかの枝にも蜜採りが数人へばりついていたのだ。

「びっくり仰天だよ」と、幻空さんが座っていった。

「わしはあの蜜採りに聞いたんだ。もし落ちたらどうするんだ、とすると答えがふるっている。『落ちたときが、おれの寿命の尽きたとき』だとき」

「アイヌの言葉が通じるのですか？ 介護のむすめとはなにも通じなかったけど」

「わしの得意なアイヌの言葉は、残念ながらここでは通じない。この連中はクリル語だ。わしは残念ながらクリル語は知らない」と、謎をかける。

「じゃあ、どうしてあの蜜採りと話ができたのです？」

「びっくり仰天さ、まったく」と、幻空さんはにやりとする。

「わしらの和人の言葉が通じたんだ」

「まさか、こんな島で！」

「本当さ」

「どこで覚えたのでしょうかね」

「それさ。おまえの父上からではないか、と鹿次郎さんはいったよ」

「父上はどこです？」

「ずっとずっと、上らしい。だが、おれたちは近づけないのだ。蜜採りに聞くと、この段から上は、神様のお許しがないと登ってはい

けないそうだ。たしかにもう綱も薦もないから、登りようがない」
「神様？」

「そう、神様だってよ。仏様といって欲しかったよ、わしは。和人の言葉もその神様から教わったのだそうだ」

「お許しは、どうすればもらえるんです？」

「待つんだそうだ」

「いつまで？」

「何年かに一度の祭りのときまで、といったな」

「その祭りはいつですか？」

「うまいことに、今度の満月の夜だそうだ」

「じゃあ、もうすぐですね！」

また鳴動がした。大樹はおおきく、ゆさゆさと振れた。

「もしや！」と叫んで、幻空さんは鳥飼いをみた。

「ひとり、落ちましたよ」と、さっきからずっと蜜採りをみていた吉蝶さんが、冷ややかにいった。「のりだして巢に手をのばしたところを揺さぶられちゃあ、どうしようもありませんや」

幻空さんは合掌した。

「なにも叫ばず、うれしそうにずっと落ちていった。仲間が落ちたのに、のこった連中はまた平気ではじめましたよ。恐怖のかけらもないんですかね」

「恐怖を感じたらこんな高所で、蜜採りはできないだろう」

「妙ですな。蜂もふらふらするし、蜜採りも酔ったようにこわがらない。わたしの考えですがね、恐怖や攻撃する気持ちを除くにかがあるんじゃないか、と思うんですよ」

「たとえば？」

「この大木の樟気、それにあの草の煙り」

「そういえば、わしのけつの穴もむずむずしなくなったよ。わしは高いところが大の苦手で、震えながらここまでやっと登ってきたんだ。ところで、吉蝶さん、いまわたちはどの位の高さにいるんだろうね？」

「わたしは登りながら大体測りましたが、ここまでで約十丈はありました」

「十丈というと百尺だ。蝦夷で伐採する巨木でも百尺の大木はめずらしい。それがこの大樹ではまだ途中の高さだ！ てっぺんまでどれほどあるか、想像もつかないな」

「こんな高さから落ちたくないですな。蛙のようにつぶれた死に様というのはいやですね。猪平さんがそうだった。やはり、この木から落ちたのかな？ どうしてかな？」

わたしは黙っていた。

*

めずらしく霧が晴れ、満月が中天にかかった。

だが、寒冷地の冷氣と火山島の熱氣とがまじりあって島のまわりの気流は乱れ、乱れた気流で星ははげしく瞬き、ぐるぐるとまわり、満月すらも揺れ動いてみえる。

今夜は父に会えるかもしれないと思うわたしのころも乱れ、夜空の月や星たちのように揺れ動く。

鹿次郎先生、幻空さん、鳥飼いの吉蝶さん、そしてわたしの四人は、家をでて流れをくだり、祭りがおこなわれる大樹に赴いた。

星の瞬く夜空を背負って、全貌をあらわした樹影に、だれもが、息をのんだ。

「おお、なんというおおきさだ！ この大樹は巨大な森だ。宇宙だ。ここに、ひとつのいのちが宿っているとは！ いのちの、なんという不思議さだ」と、鹿次郎先生はうめいた。

「大伽藍、いや、莊嚴な羯磨曼陀羅だ、これは。この大樹はみずからのまわりに、聖なる結界をはっている」と、幻空さんが感嘆の声をあげた。

「うーむ、まるでおおきな鳥籠だ。いや、みんな引き寄せられてとらえられてしまう鳥網だ・・」と、鳥飼いがつぶやいた。みな、それぞれに思いに打たれていた。

背後の火山が時折火を噴き、まばゆい閃光を放った。そのたびに樹影は赤く染まった。火口から熔岩が血のようにふきでて、山の斜面を真っ赤に輝く筋となって流れくだる。

すでに村人が大樹のもとに集まっていた。男も女も、あの、たいまつ草に火を点じ、手にもってふりながら、ウポポのような謡を歌い、大樹のまわりを舞っていた。

そうだ、これだ。祭り草というのは！

祭り草を携えて・・並口坦、だ。

燦った煙りがあたりに立ちこめ、村人はだんだん陶醉していった。草の煙りがひとを惑わす、という鳥飼いの想像はあたっている。

トト、トントン、トムトムトム

打楽器が打ち鳴らされた。その響きにうながされるように長人が立ち昇る煙りとともに大樹に登っていった。村人は打楽器の響きに、

ますます夢うつつのように歌い、踊った。

やがて、大樹に登っていった長人が降りてきた。踊りの輪のそとにいたわたしたちに近づき、みんな登れ、という合図をした。

「神様が待っている」

短く、長人が和人の言葉でいった。

ニトニトニト　トクトクト

打楽器が次第に下の方に遠ざかる。

煙りは大樹に沿って昇ってくる。わたしたちも、いささかうつとりとした気分になってきた。大樹をとりまく夜の闇に、このまま身を踊らせてもいい気持ちにすらなった。

「葬式で線香を焚かれているようなものだな」と、二段目の台のところで、先生が幻空さんにいった。

「蚊遣りに燻された蚊ですな」と、鳥飼い。

ふたりのいつもの軽口も、だんだん陰気になった。

「大勢いっぺんにはいかなん方がいいだろう。まず、わたしと馬之助が先にいく。親子の対面を先にさせてやろう」と、三段目にたどり着くと、鹿次郎先生がいった。

「水入らずで馬之助さんひとりにさせたらどうだ？」と、幻空。

「いや、おれは馬之助の後見人だからな」と、先生。

いままでは三段目が行き止まりだったが、いま、一本の綱が上からさがっていた。その綱の先にわたしの運命が待っていた。

わたしが先に登った。すぐ小さな台にたどりつき、わたしはそこで鹿次郎先生を待った。それより上は綱がなかったからだ。

「神様！」と、鹿次郎先生が上にむかって呼んだ。

返事がない。耳を澄ます。

ニトニトニト　トクトクト

はるか下に打楽器の音が聞こえる。

ドドドド、ドドドドオオ！

噴火の轟きはおおきくなるばかりだ。枝をすかして、眼前にみえる火口から灼熱の熔岩があふれでる様子がみえる。

「雨宮甚内！」と、鹿次郎先生がふたたび呼んだ。

「だれだ」　上から声が降ってきた。

「大前鹿次郎だ。息子の馬之助を連れてきた！」

すると、するすると綱が降りてきた。わたしはどきどきした。

「先に登れ」

先生に促されてわたしは綱に手をかけた。すぐ、おおきな台の底に頭が当たった。その床の一部が開き、わたしは首を突っこんだ。そこはひろかった。壁と窓があり、屋根がかかっていた。窓のそばの机には、遠眼鏡や、硝子瓶、洋書などが積まれてある。

燭台が灯され、そのそばにひとりの男が影のように座していた。小柄な体を作務衣のような衣服で包む。髭を生やし、総髪をうしろに束ねる。目がじっとわたしに据えられた。

「馬之助か」

「雨宮馬之助です。父上でしょうか」

「うむ。それにしてもおおきくなった。わしはおまえが赤子の姿しかしらぬ」

「わたしはそのときはまだ目が開いておりませんので、はじめてお目にかかることになります」

「おまえの母上は元氣か」

「はい。母に父上を探してくるよう命じられて、参りました」

「うむ。わしはもう江戸などには帰らない。ここがわしの終いの住処だ。だが、なぜだ？」

「雨宮家の当主が生死不明のままでは、おとりつぶしになる、と」
「それは口実だ。おまえだって雨宮家など継ぎたくないだろう。もう幕府に仕官などする時代ではない」

鹿次郎先生が床から顔をだした。

「おう。鹿次郎か、ついにきたな」

「や、甚内か、何年振りだな」と、先生はあがってきて、わたしと並んで座った。

「おまえか？ わたしを連れもどすよう、お園と馬之助をそそのかしたのは」

「お園殿は心配しておったぞ」

「なにをいまさら・あれはおまえにくれてやったはずだ」

「息子の馬之助のまえで、その話はよせ。ところで甚内、なんでもた、こんな高いところが氣にいつて住んでいるんだ」

「説明すると一晩や二晩ではすまない」

「簡単でいい」

「うむ。これから奇妙なことがはじまる。それをみればわかる」

「なにがはじまるんだ」

「祭りだ」

「祭り？ 下でもうやっていたぞ」

「つまらぬ下界の、人間どもの祭りではない。数年に一度しかみられない、絢爛たる、樹上の祭りだ」

七、業火

「祭り？ そんなものにうつつをぬかして、おまえの研究はどうしたのだ」

「わしは学問を極めるために、祭りを待ちこがれてここにいるのだ」

「じゃあ、どんな研究なんだ？」

「樹冠における生物相の多様性、植物性幻覚物質の抽出、蜜と生体活力源の結晶構造、飛翔の原理、絶滅有翼種の研究、善悪一元論などなど・研究課題は山積している。それらを研究する時間が、あとなぜか数十年、祭りの回数でいえばあと数回しかわたしにはのこされていないと思うと、たまらないのだ。だから、延命と蜜との関係も、目下優先課題の研究だ」

「絶滅有翼種の研究というのは、なんだ？」

「この樹上の祭りを最後までみればわかる」

「祭りとどういふ関係がある？」

「鹿次郎、おまえ人間が空を飛べると思うか？」

「道具を使えば飛べるかもしれない」

「いや、おのれの筋肉で、だ」

「翼があっても無理だろう。人間の体は鳥とちがって何倍も重い。これだけの体重を支える揚力を生みだすには、巨大な翼と膨大な活力源を必要とする。人間の筋力では限界がある」

「流石、水戸公がみこんだ当世一級の洋学者だな。だが、昆虫をみよ。体に比例して、鳥よりもはるかに小さな羽だ。そのために膨大な活力源を使う。筋肉も羽も小さいのに、長時間、長距離を飛ぶ。いったい、なにが昆虫にそのような活力をあたえているのだ？ 不老長寿の研究を依頼されてから、昆虫のその謎を探求しているうちに、ある重大な発見をしたのだ・その活力源を昆虫にあたえるのは植物なんだよ。花なんだよ。花」

「つまり蜜だな」

「たちまちに学問の話にふたりは没頭しはじめた。口を挟む余地はわたしにはなかったが、蜜に関する議論に引かれた。

「花の蜜だ。花が蜜を昆虫に提供するんだ。なんのためだ？ 花が授粉するためだ。鳥も蜜に誘われるが、鳥の役割はむしろ実を、種を運んでもらうほうだ。花の奥まで、そっと入れる蜜蜂たちが、花にとっては最適なんだ。まず色や匂いで誘いこむ。蜜で幻惑させ夢中にさせる。蜜蜂は花の髄で陶酔して震える。それが花粉を巻散らす。蜂はそこへ褒美に、飛ぶ活力源になる蜜をちょっぴり貰う・蜂は、花の季節以外にも活力源を必要とするから、蜜を長期に保存する方法を獲得したのだ。なんと巧妙な仕組みなんだ。花の陰謀だよ。わしは花と蜜の関係に興味を持った。蜜はおそろしく効率のい

い活力源としての構造を持っている。蜂の飛行は蜜にささえられている」

「でもこの大樹のどこに花があるのだ？ わたしは疑問に思っていたのだ。蜜蜂の巣が無数にあるのに、花がないのは不思議だ、と」
「わたしもはじめはそう思った。なぜ、わたしがこの地にたどりついたか、長い話になるからやめるが、簡単にいえば、奇妙な蜜を産する奇妙な場所がある、とオロシア人に聞き、その見本を蝦夷地図と交換して手に入れ、壺に隠して江戸に持ち帰ったことがある。そうだ、あの壺はどうなったかな」

「あれは景徳鎮ではなかったか」

「土産屋で買った安物の瀬戸物の底を抜いて、裏にこの島の位置を覚書し、蜜の見本の小壺をいれた。底を抜くとき失敗してひび割れたのでな、粘土を塗ったくって天日で乾かし、素焼きのようにみせかけておいた。だから、みにくいきたない壺だぞ」

「そうか！ そいつだったか。幕府の間諜に持ちさられた壺は・・・」
「なに、盗られたか・・・まあいい。あんなもの、見本だからな。どうせ、ここにはどっさりあるんだ。その後の調査で、蜜蜂たちがなぜ花もない島の、この大樹で蜜を集めることができるか、重大な発見をした」

「それで？」と、鹿次郎先生は身を乗りだす。

「じつはな、この大樹は、むせ返るばかりの花を咲かせるんだ！」

「まさか！ この大樹はなんとという種類なんだ」

「わからんのだ。なにしろ、ほかにみたこともないからな。シーボルトから世界樹木図鑑を譲りうけたが、こんな種類は世界のどこにもないよ。隔離された火山島、寒冷帯なのに亜熱帯に近い気温。たぶんここでしか育たない特別種だろう。いずれにせよ、この大樹が花を咲かせるとは意外だった。だれもしらないわけだ。なぜなら、花は、大樹の上部に、植物学では樹冠というが、その樹冠に花を咲かせる。地上三十丈以上の高さだ。下からはみえるはずがない。さらに五年に一度しか咲かない。さらに・・・」

「さらに？」

「満月の夜、三日の間しか咲かない。つまりその間、この大樹は祭りをおこなうのだ。そして蜜蜂が集まってくる。それまでは貯蓄した蜜で食いつないでいた蜂が、五年に一度のお祭りに、蜜を求めてやってくる。夜中になると、花が開くのだ。このあたり一面が真っ白になる。むせかえるような、陶酔性の匂いを放つ。鳥などの生き物たちはみな陶酔する。もちろん人間もだ。すばらしい幻覚をみるよ。いや、幻覚なのか現実なのかわからない。そして、祭りの掉尾を飾るのがまたおどろくべきことなのだ。わしにはその出現が現実なのか幻覚のか、区別がつかかねるのだよ」と、父は口から涎を垂

らした。

「うーむ、阿片の一種ではないか？」と、鹿次郎先生もはやくも興奮してきた。

「わしもそう思っ、罌粟の花と比較研究中だ」

「なぜ、五年に一度なのだ？」

「うむ。それも研究中だが、わしはこう考えている。栄養を地から吸いあげ、花を咲かせるのに十分な栄養を、この高さの樹冠に蓄積するには何年もかかる。さらに、火山だ。五年に一度の割合で、火山活動が活発になる。それとも関係があるはずだ。さらに、海流との関係も考えられる。この島のまわりでは親潮と黒潮が入り交じっている」

「では、なぜ満月なんだ？」

「わからん。ただ、夜開く花だから、あかるい方がいいのだろう。蜂も暗闇ではみえにくいし、蜂がこなければ花を咲かせる意味もない。だから花は夜目にもあざやかな純白だし、月の光で怪しく発光する。おまえ、どう考える？」

「うーむ。月の光には、なにか生き物のところを狂乱させる力がある、ともいうな」

「なるほど。満月の夜になぜ花を咲かせるか、その理由として面白い考えだ」

「祭りの最後が、といていたが、それはなんだ？」

「先に教えてしまつては興味も半減する。だから、いまは教えない。だがな・鹿次郎、おまえ、クリシタンの聖書をしているな。あれに天使というのがでてくる」

「ああ、翼のあるおんな、だな」

「あれもまんざら作りごとではないぞ。人間だって飛翔できるかもしれないぞ。蜜のような濃縮された活力源があれば。すると、天使は悪魔となり、悪魔は天使となる。清いは邪悪、邪悪は清い」

「なにをいうつもりなんだ？」

「それ以上はいえないな。重大な秘密だ」

「秘密を隠蔽するな。それは水戸公に・」と、いいかけて、鹿次郎先生はわたしにむく。

「すまんが、馬之助、ちょっと下に降りていてくれないか。すぐ済む」

これから謎の核心に迫るのに中座させられて不満だったが、先生の言葉に従った。綱を降りはじめると、上の話し声が切れ切れに聞こえた。

「約束とちがう。妙薬の研究はすべて・それは甚内、裏切りだぞ・」

「裏切ったのは、鹿次郎、おまえとお園・」

「お園どののは本来ならわたしの妻となるべきものを、おまえが力づくで！」

「教えてやろう。あの蜜をお園にも試したよ。そしたら、産後の体なのに、すっかり乱れての・・・」

それから罵倒する声が聞こえた。

わたしは耳をふさいで、下の台でうずくまった。

突然、大きな声がして、塞いだ耳にも聞こえた。

「わしは、だれにもおれの研究を売ったりはせぬ！」

「首に縄をつけても引っ張っていく！」

「首輪をつけられて尾っぽを振っているのはおまえだろう。水戸の大め！」

「首に縄をかけられて晒し首になるのは、甚内、おまえだ！」

「うぬ！」

ぱーん、と音がした。

しばらくして、頭上の床が開いた。そして父が顔をだした。手に短銃を下けている。

「馬之助。話は終わった。あがってこい」

「鹿次郎先生は？」

「打ち殺した。わしの研究を強引に持ちさろうとした。邪魔者はない」

わたしは絶望した。父を探して、地の果てまでやってきたのだ。

そしてめぐりあったばかりなのに、このような悲劇が起きた。いつ

たいこのひとは本当にわたしの父なのだろうか。父とは思いたくない。

わたしは先生、もしかしたら本当の父かもしれない鹿次郎先生

を、短銃で打ち殺した殺人者だ。

「いや、邪魔者はまだ、いるぞ」

わたしの床下から鳥飼いの声がした。鳥飼いはひらりと台の上に

飛び乗って叫ぶ。「雨宮甚内だな」

「なんだおまえは？」と、父が聞く。

「幕府奉行方、村岡彦左だ。召し捕りに参った」

「なんの科だ？」

「ご禁制の蝦夷地図国外持ち出し、ご禁制の阿片製造密売、水戸藩との謀議および機密漏洩、ご用方服務違反、短銃不法所持、大前鹿次郎射殺現行犯」

父は床を閉じた。鳥飼いはぱっと綱に飛びつき、よじ登った。

ふたたび床が開き、短銃がのぞいた。

「ふふふ、そうやってぶらさがっておれば、いい的よ」

短銃の引き金に父の指がかかった。

パーン、と音が響いたのと、どどどっ、と地鳴りがしたのとほぼ

同時だった。鳥飼いをぶらさげたまま、大樹が揺れた。

火口から熔岩が花火のように散った。もっこりと火口から熔岩が流れた。熔岩の熱が放射されて、頬が熱くなった。

鳥飼いはゆらりゆらりと綱につかまっていたまま、台の上をいったりきりした。父は短銃でゆれる的をねらうをやめ、小刀を綱にあてた。綱は切れた。鳥飼いは綱にぶらさがったまま放りだされた。落下しながら鳥飼いは台の縁に手をのばした。指が縁にわずかにかかった。いくら忍びでも、指だけではいつまでも体重をささえてはいられない。

わたしは鳥飼いの腕をとっさにつかんだ。一瞬わたしの腕にぐっと重さがかかったが、鳥飼いは反動でぱっと台に踊りあがった。

「どうして助けた？」と、鳥飼いはわたしに聞いた。

「恩を返しただけです」

ふたたび、大地が揺れ、大樹がゆれた。熱を帯びた灰が降ってきた。あたりがぼんやりとあかるくなった。

「みろ！ 花だ、花だ！」

上の台で父の狂乱した声がした。

わたしと鳥飼いはあたりをみた。

嗚呼！ あたり一面に白い花が、いま開こうとしていた。むせかえるような芳香が漂った。月の光を浴びて、ぼうっと発光していた。わたしと鳥飼いはうっとりとし、つぎつぎに開く花にみとれていた。堅く閉ざしていた夥しい数の蕾が、いのちを開いてみせたのだ。

ぶうん、ぶうん、ぶうん

羽音がして、蜜蜂たちが昇ってきた。蜜蜂にとっては五年に一度の大饗宴だった。狂ったように花卉のまわりを飛び交い、花の髄にもぐりこんだ。

すると、夜なのに、色とりどりの鳥たちが集まってきた。そして狂乱したように囀りはじめた。

わたしは夢中で懷から鳥笛をとりだし、奏でた。鳥たちはわたしのまわりを飛びまわり、羽ばたき、囀りあった。

鳥飼いは迷っていた。雨宮甚内逮捕の執行中だった。

だが祭りがはじまったのだ。鳥飼いは笛をだそうと懷に手を入れた。油断だった。この機会をねらっていた短銃が上から火を吹いた。鳥飼いは台の上に倒れた。

「吉蝶さん！」

わたしは笛をやめて鳥飼いの上にかがみこんだ。胸を打ち抜かれている。

「ああ、馬之助さん、鳥笛をつづけてください・・わたしの作った鳥笛で、馬之助さんのうつくしい調べを聞きながら、この極楽鳥た

ちに囲まれて死ぬるのなら、悪くない。幻空さんから筏を借りて三途の川も渡らなくて済む。早く、頼みますよ」

わたしは吹いた。無性にかなしかった。この樹上の祭りは、殺戮の血で汚されていた。

「は、母上・・わたしの母上だ」

鳥飼いは目を夜空にあげた。

純白の翼をはばたかせて、おんなが、夜空から降りてきた。

わたしの笛を聞きとめると、ゆっくりと台に降りてきた。

「お悠さん・・」

わたしは笛を吹きながら、こころで呼びかけた。

おんなは全裸で、黒髪をうなじにまつわらせ、乳房を片手をかけ、もう一方の手でわたしの笛を吹く手に触れた。その手の感触をわたしは覚えていた。

「・・天女だ」

鳥飼いがつぶやいて目を閉じ、それきり開かなかった。

おんなは蝶々が羽根を休めるように、ゆるやかに純白の翼を開いたり、閉じたりした。

ドドドドーン！

激しい響きとともに大地が鳴動した。熱風と熱い灰が空から降ってきた。そればかりでなく、灼熱の岩石が火口から高く吹きあり、島全体に飛び散った。そのひとつが樹冠の葉に火をつけた。

火山の熱がいつそう活動を刺激するのか、蜜蜂たちは花のまわりを興奮してぶんぶん飛びまわっていた。

葉についた火が、別の枝に移った。

おんなは舞いあがり、飛び去っていった。

わたしは危険を感じて、上の台に呼びかけた。

「父上、危険です。降りましょう！」

すると床が開いて父が顔をだした。

「馬之助、あがってこい、すばらしい眺めだ」

「樹の葉に、火がつかしました！ 燃えひろがりますよ」

「なに、このくらいの火はよくあることよ」

綱が切られていたので、登ることができなかった。わたしは幻空さんが心配になった。ひとまず降りてみることにした。

下の台で、幻空さんは座禅を組み、瞑想していた。

「幻空さん、大変だ。火が、炎が樹に移った。瞑想している場合ではないですよ」

燃えあがる炎で夜空が赤く照り映えていた。炎が樹冠を包みはじめていた。

「法力で雨を降らせ、火を消し止められませんか」

「うむ。加持祈祷するには護摩壇を築かなければ」

「この台が、護摩壇のようなものでしょう」

「うむ。供物がある」

「蘇はないけれども、蜜ならそこにいっぱいぶらさがっているじゃないですか」

「法具がないと修法が・・・」

それを聞いてわたしは激怒した。

「法具が欠けているからできないとか、なにがないからできないとか、いざというときに役に立たないのなら、意味がないじゃありませんか！」

幻空さんははっとして立ちあがった。そして印契を結び、かっと目を開いた。

「両部大日の真言を、われいざ唱えん！」

南無神変大菩薩 南無あびらうんけんそわか

あびらうんけん ばざらざとばん

どどどっ、と膨大な熔岩と黒煙が火口から舞いあがった。火山はついに活動を開始したのだ。

噴煙は夜空を焦がし、星空を消し、満月を覆った。

大樹は巨大なたいまつのように、先端から炎を吹きあげていた。ごうごうと火の粉が枝葉の間で舞っていた。

あびらうんけん ばざらざとばん

あびらうんけん ばざらざとばん

すると、暗雲が沸き起こり、島をとり囲んだ。

ざざあ、と雨が降った。雨はたちどころに豪雨に変わった。

「幻空さん、やった！ やった！ ほら、雨が大樹の火を消してくれる」

「おお、真言の、偉大なる法力よ！」と、幻空さんは感極まった声をあげた。

わたしと幻空さんは台に立ちあがって、大樹の頂きをみあげた。雨が頬を打ち、口の中に流れこんだ。炎はだんだん勢いを失い、もうもうと水蒸気をあげはじめた。

ぴかり、と稲妻が走った。たてつづけに雷鳴が轟いた。暗雲の中を幾筋もの光の亀裂が、のたうって走った。

「おお、おそろべし。地、水、火、風、空、五大に皆響きあり」

「まずい！ この大樹に稲妻が落ちたら、大変だ。幻空さん、法力

が効き過ぎた。稲妻を止める真言はないのですか？」

「そ、それはしらない。よし、こうなったらいろんな真言を試してみようぞ。虚空蔵求門持法だ・」

のうぼう あきやしゃ きやらばや おん ありきや
まりぼり そわか

ばりばりっ！ 大轟音とともに、目もくらむ光の柱が縦に走った。わたしはすさまじい衝撃で、台から跳ね飛ばされ、宙を飛んだ。そして真っ逆さまに大地に落下した。死は、わたしの番だった。

ふわり、と宙で、わたしは抱きすくめられた。

ばさ、ばさ、っと力強い羽音がしていた。おんながわたしを抱きかかえて飛んでいた。

暗雲の中を稲妻が走っていた。舞いあがった空から、大樹がてっぺんから裂けて、火を吹いているのがみえた。

業火だ。

人間の諸悪を抱えて、大樹は燃えていた。父もあの業火に焼かれていたろう。鹿次郎先生も、鳥飼いの吉蝶さんも、そして幻空さん。

おんなはわたしを抱いたまま、さらに大空に舞いあがった。

島がみえた。島の頂点から赤い炎と黒煙が絶え間なく噴きあがっていたが、それは、小さな島に過ぎなかった。

噴煙を抜けると、夜空があかるくなった。

満天の星たちが瞬いていた。満月がなにごともしなかったように中天にかかっていた。

悠久の時間が、天にあった。

やがておんなはわたしを抱えたまま、下降した。そして島の、湖の浜にわたしをそっと降ろした。

それから、ふわりと舞いあがり、いつくしむようにわたしのまわりを浮遊していたが、やがて夜空に消えていった。

「大日如来だ・」

うしろから声がした。

幻空さんが浜に立ちつくし、空をみあげていた。

八、帰還

幻空さんの、浮かぶ天幕は浜に置いたままにしてあった。熔岩は太い火の河となって火山の斜面をくだり、麓にむかっていた。灼熱の岩石が夥しく降り、湖にも落ちて、ジュジュッと音を立てた。

一刻も猶予はならなかった。天幕を湖に浮かべ、わたしと幻空さんはそれに乗った。引潮がわたしたちを外海へ吐きだした。

幻空さんは落雷で台に叩きつけられたが、落下を免れた。いそいで大樹をくだった。落下したわたしのことは助からないとあきらめ、洞穴を抜け、雨のように降る岩石を縫って浜に走った、といった。

嵐には会わなかったが、櫂がないから、風と潮まかせで漂った。水はわずかに残っていたが、すぐなくなった。せつかく島から生きて逃れられたのに、おだやかな海の上で死ぬことになった。

わたしは幻空さんに遺言しておいた。コタンの長老に預けてきた手記を、さるひとに届けてほしい、と。そして住所と名前を伝えた。

幸運にも、シトカに助けられた。シトカはあれから択捉にもどって準備を整え、択捉のアイヌと救援にやってくるところだった。そしてなつかしい厚岸のコタンにもどった。

*

蝦夷は春爛漫だった。

ちいさな野の花が一面に咲き乱れているのを見ると、厳しい風雪を耐えたからこそ、可憐に咲くのだ、ということがわかる。

人間もきつとそうにちがいない。

幻空さんは、あのとときの雷雨は真言の力が呼び寄せたのではなく、偶然の自然現象だったと、ひそかに思っているらしい。わたしがそのことに触れると、恥ずかしそうに話題を避けた。

幻空さんは、人生観も仏教観も変わってしまったよといって、コタンの土地を借りて畑を耕作しはじめた。アイヌは耕作というものをほとんどしないから、珍しかった。手慣れているのでわたしが感心すると、「わたしは百姓の生まれだからな」と、片目で笑った。

いいひとだ。

わたしも幻空さんから学ぶものが多くある。畑を手伝ったり、しばらくコタンでいっしょに暮らそうと思う。アイヌのひとたちのた

めにわたしもなにかできることがあればいい。

厚岸では、侍殺しのことはだれもしらないという。内密に処理されたのかもしれない。

鳥たちとすっかり友だちになった。森の獣たちとも仲良くなった。鳥笛のお陰だ。楽の音は、人間だけでなく、生きている物のころに通じるのだ、と思う。

笛を吹きながら、ふと鳥飼いの吉蝶さんを思いだすことがある。

*

浜梨の紅色の花が、厚岸の浜を一面におおった。

あまい芳香でやる瀬ない気持ちになり、わたしは生まれてはじめて、句というものを詠んだ。

紅の
くれない

匂いあらたな

蝦夷の春

終章

お悠は顔をあげた。

目のまえに、隻眼の僧侶が端座していた。

「馬之助殿から、お渡しするようにといわれておりました。そしてこれも、お渡しすべきかと思ひまして・・・」

僧侶は懷紙を開いた。鳥笛だった。

「わたしにとっても、かけがえのない青年でした。それが・・・森の中で、あんな風に残り姿で発見されるなんて、信じられません。犯人は切り口からみて、侍にちがいありません。まことにかなしいことです」

僧侶は瞑目し手を合わせ、つぶやた。

菩提婆娑詞・
ほじそわか

*

すでに夕闇がお悠の背中に忍び寄っていた。

お悠はうなだれて、僧侶が立ち去ったあとに読み通した文と手記をみつめていた。

ぽたり、と一滴、涙が文に落ち、滲んだ。

お悠は紅色の簪かんざしを髪から引き抜いた。鳥笛と並べ、簪を文と手記の上にそっと置いた。それからお悠は、抱くようにその上に体を伏せ、さめざめと泣いた。かなしみで張り裂けそうなお悠の胸に、馬之助の手記の断片が鮮やかに蘇った。

*

波が岸から去っていく

死者の髪のような

おぞましい藻をのこして

けれど、わたしのかなしみも

岸から去っていく

アーホイヤ

けれど、波はまた寄せてくる

わたしのころにも寄せてくる

アーホイヤ

死んでしまったひとの思い出が・・・

*

*

わたしは海の風
わたしは海の波
わたしは海の響き
わたしは絶壁の鷹

イヤ、ホウ

わたしは朝露

わたしは川の鮭

わたしは森の湖

わたしは大きな角の鹿

イヤ、ホウ

わたしは語る

わたしの言葉は種

やがて、ひとのところに花開く

*

紅の

匂いあらたな

蝦夷の春

(完)

参考文献

書籍

- | | |
|----------------------|-----------|
| 「北方領土―古地図と歴史」 | 同盟通信社 |
| 「アイヌ語方言辞典」 服部四郎編 | 岩波書店 |
| 「コタン生物記ⅠⅡⅢ」 更科源蔵、光 | 法政出版局 |
| 「アイヌの生活(写真集)」 河野広道 | 楡書房 |
| 「間宮林蔵」 吉村 昭 | 講談社文庫 |
| 「密教」 頼富本宏 | 講談社現代新書 |
| 「もう一人の空海」 寺林 峻 | 春秋社 |
| 「不老不死の超古代史」 | 新人物往来社 |
| 「BAIDARKA」 ジョージ・ダイソン | 情報センター出版局 |
| 「日本人は海が嫌い」 田辺英蔵 | 光文社文庫 |
| 「大漢和辭典全十二卷」 諸橋轍次 | 大修館書店 |

雑誌

- 「ナショナルジオグラフィック日本版」
1995/5月号(ハイロオオカミ)
1996/10月号(千島北方四島)
1997/1月号(巨木の上に宿る不思議な生命)
1998/6月号(ネパールの蜂蜜採り)
「中央公論」1997/7月号

(特集・二十一世紀の花鳥風月、その三、花/おもむく)

新聞記事

- 「朝日新聞1999/2. 23夕刊」 「般若心経・世界に伝えたい」
「朝日新聞1999/2. 13」 「いま古武術が新鮮」

*文中のアイヌの語り、伝説、歌謡については、参考文献の「コタン生物記」よりヒントを得て、創作したもの。

*文中の、「クリル列島」は明治以降、「千島列島」と呼ばれる。